

国際アーサー王学会日本支部 第35回年次大会発表要旨

研究発表

「武勲詩」における妖精モルガーヌ —『ロキフェールの戦い』を例に—

渡邊 浩司 (中央大学)

フランス中世文学の代表的なジャンルの1つに「武勲詩」がある。『ロランの歌』を皮切りに11世紀後半に生まれたこのジャンルは、12世紀中頃にかけて初期の作品群を生み、その後もさまざまな展開を見せた。その結果「武勲詩」には、シャルルマーニュ、ギヨーム・ドランジュ、反逆の諸侯を中心とした3つの作品群が生まれた。

このうちギヨーム・ドランジュを中心とした作品群に属する『ロキフェールの戦い』は12世紀末から13世紀初めの成立と推測されるが、この作品の韻文版を伝える10写本の中の5写本には、他の5写本には見られない独自のエピソードが見つかる。それは主人公レヌアールが、妖精モルガーヌの住むアヴァロンへ連れて行かれるエピソードである。

本発表では、「武勲詩」の潤色過程で「アーサー王物語」の作中人物が取りこまれるようになった例として、『ロキフェールの戦い』の描く妖精モルガーヌ像を検討する。

シンポジウム

老いは愚かさを克服できるのか？

——中世文学における老いと成熟との不連続性をめぐって——

はじめに

ドイツ中世宮廷文学の最盛期は1200年頃とされ、その時期の偉大な詩人たちによる叙事詩や叙情詩は、中世後期にいたるまで規範とされ、更にはパロディの対象とされ、貴族のみならず社会各層の文化の土台となった。

ドイツの宮廷文学は当初、人のあるべき姿を表現しモラルを提示しようとした。それまでキリスト教の聖人を人々が模範としていたとすれば、宮廷の騎士や貴婦人が人々の行動規範を体現する存在になったことは革命的变化と言える。その変化は肉体とそこに発する恋愛をテーマ化している点で、いわゆる「12世紀ルネサンス」の一環とも捉えられうる。ただし、中世キリスト教文化において、肉体と男女間の愛はあくまで罪深く、常に留保つきで許容されたのも事実である。つまりそれらはあくまで祈りと理知的節度で制御されるべきものであった。

ここで一つの問いを我々は提示する。すなわち「人は老いることで賢くなり、無知や肉と情欲の害から離れることができるのだろうか」という問いである。

松原は主人公の罪の償いと成長との関係を扱う『パルチヴァール』について論じる。伊藤

は愛（ミンネ）の概念論争が最も端的に表現された恋愛詩について論じる。渡邊は成長（老化）と罪深き愛の克服が単純に結びつかない例を『トリスタン』に見いだす。

更にこのテーマについて、ドイツ語圏に特有の傾向が看取できるのか、という点について、ドイツ語圏中世宮廷文学の成立に大きな影響を与えたフランス宮廷文学の動向を踏まえるべきで、その観点から高名が「狐物語」について論じる。また、このテーマの通時的・歴史的な変遷をたどる目的で、嶋崎はキーワードとなるドイツ語“tump(tumb)”の意味論的・語用論的变化を語学面から解明する。

1. 『パルチヴァール』における主人公の罪と「愚かさ」

松原 文（立教大学）

パルチヴァール研究が救済史の文脈に立つことが多かった 20 世紀半ば、“tumb「愚か」”と形容される主人公の罪過と、聖杯王となるまでの成長の分析に関心が集まった。Haas (1964) らは“tumb”とは経験不足に由来する認識・判断力の欠如だと考え、主人公は初め“tumb”ゆえに聖杯王を救うはずの問いかけを怠るが、その後世俗と倫理の二面で未熟さを克服していく、と解釈した。しかしそのような発展的構図を予め設定せずにテキストを追えば、実は作品後半の筋はガーヴァーンに担われ、主人公の倫理面の成熟のプロセスは描写されていないことに行き止まる。また主人公は聖杯城に再到達する場面に至っても、“tumb”の対義語“wis「賢い」”等が冠されることはない。“wis”はアーサー王と宮廷女性、異教の醜い女性、小姓、魔術師、そして神の形容詞としてのみ登場し、騎士に対しては武芸などに「通じている」という述語的な用法しかない。本発表では“tumb”と“wis”の用例分析を通じて、中高ドイツ語文学における人物造形の弾性と男女の差異、そして未完の原典を完結させたヴォルフラムの構想について考える。

2. 宮廷恋愛詩における「若さ」と「老い」

伊藤 亮平（松山大学）

12-13 世紀のドイツ宮廷恋愛詩ミンネザングでは、「老年」＝「思慮深さ、分別」、「若さ」＝「未熟、無分別」という図式が必ずしも成り立っていない。

ミンネザングにおいて「老い」は、恋愛に似つかわしくないものとして表面的には敬遠される。しかし実際は、変わらない愛を女性に捧げたことへの「誠実さ」の証として「老い」が表現されている。対照的に女性は、歳を取ることもない存在として描くことで、女性の「不変」(stæte)が表される。

しかし、ラインマルやヴァルターが活動する 1190 年代以降、女性の「老い」について言及が見られ、女性が永遠の存在から、肉感的な、現実的存在へと変化を見せる。さらにナイトハルトは「年老いた女性」が恋愛にうつつを抜かし、娘がそれを咎めるという、「老年」＝「賢者」、「若者」＝「未熟、無分別」という構図を逆転させることで笑いを作り出そうと

する。その際彼は、「恋愛」と「老い」の対照性を誇張する。

一方で、ヴァルターやナイトハルトは、実際の自分の老いについて言及するリートも残している。その際、「過去礼賛」(laudatio temporis acti)をリートの主題とし、「老い」＝「賢者」のイメージを強調する。このように恋愛詩において「若さ」と「老い」のテーマは一元的ではない。本発表では、恋愛詩における「年齢」のモチーフの揺れを考察したい。

3. 『トリスタン』における二代にわたる「若気の至り」？

—イゾルデとの愛をめぐる—

渡邊 徳明 (日本大学)

ゴットフリート作『トリスタン』の際立った特徴は、トリスタンがイゾルデと出会う以前の話、とりわけ両親の愛と自らの誕生に至る過程について詳細に描いている点である。そして、若き両親の情熱的な愛と、彼らから生まれたトリスタンがイゾルデと経験する愛は、パラレルな関係として比較してこそ、それぞれの特徴が印象的なものとなる。

トリスタンとイゾルデの愛は、静的で落ち着きのある、永続的な愛としての側面もあり、そこには同時代のアルトゥース・ロマーンとの共通性が確かに見られよう。成長と共に長年の間、神に対する誠実を保ち信仰を深めるアルトゥース・ロマーンの主人公は、それを通じて知を深め賢者となる。

ところが、トリスタンの愛は、死に至るまでの永続的なものでありながら、しかしついに成長によって節度を得るということを知らない激しいものとして終始するとも言える。アルトゥース・ロマーンのような主人公の成長のコースの繰り返し(一度は若さに任せて失敗し、成長を遂げた二度目には栄光をつかむ)、あるいは親子二代の愛と苦しみの繰り返し、といったパターンを共有しながらも、『トリスタン』の愛の行方は、アルトゥース・ロマーンのそれとは質の異なるものになる。その狂おしい愛は、必ずしも若き血ゆえの迷いではなからう。そのような対比からトリスタンの愛について考える。

4. 『狐物語』における老い

高名 康文 (成城大学)

高名は、『狐物語』における老いについて論じる。初期枝篇で老いは、相手を騙す手段として持ち出されている。ルナールとイザングランは、ともに老いを口実に相手を油断させようとするが、賢いルナールの試みは成功する一方で、愚かなイザングランは必ず失敗に終わる。初期枝篇の別々の作品で、二人はそれぞれ僧院に入るが、結局彼らの本性が変わることはない。中期枝篇の「ルナールの巡礼」では、冒頭で老いを自覚して巡礼に出たルナールが、結局中途半端に、仲間を裏切って引き返す。この展開は、ルナールの本性が決して変わることがないという認識を強化したに違いない。実際、最も後期に成立したらしい「ルナールの幼

年時代」は、狐は世の初めからずる賢く、愚かな狼を騙すということを創世記のパロディーにより描く。サイクルが発展しても、本性を変えないルナールは、新たな冒険が語られるごとに成長する、騎士道物語の騎士とは対照的な存在ということになる。

5. 中高ドイツ語における tump 「愚かな」の語義について

嶋崎 啓 (東北大学)

中高ドイツ語の tump (tumb) は古高ドイツ語以来、現代ドイツ語の dumm に至るまで一貫して「愚かな」という意味を表す。また tump は古高ドイツ語以来 wîs/wîse 「賢明な」の対義語として用いられてきた。ところが中高ドイツ語の tump はネガティブな意味を弱めた「未熟な」という意味でも用いられる。その場合、のちに経験を積んで「賢明」になる可能性があり、実際 tump は junc 「若い」と同義で用いられ、一方、対義語の wîs は alt 「年とった」と同じ含意を持つ。その際 tump から wîs に変わるの一人の同じ人間であり、tump であることは好ましいことではないとしても、経験を積んでのちに wîs になりうるとすれば完全には否定されない。そのように tump の語義が古高ドイツ語から中高ドイツ語で広がったことと、賢明でない人間が経験を積めば賢明になりうるという人間観との関連を探りたい。